

指揮官が不細工すぎる

排無

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

優しく、頼れる指揮官は不細工すぎました。

| | | | | | | | |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|
| 最終話 | 7話 | 6話 | 5話 | 4話 | 3話 | 2話 | 1話 |
| 17 | 15 | 13 | 11 | 8 | 6 | 3 | 1 |

目次

1話

「…以上が今日の出撃報告だ」

「ありがとうエンタープライズ。今日はもう上がっていいよ。ゆっくり休みな」

「わかった。指揮官もあまり無理しないように」

私の指揮官は信頼できる。私達艦船のことを第一に考えて行動してくれる。休暇は多いし、結構自由な生活をさせてもらっている。とにかく性格は素晴らしいのだが誰にでも弱点はあるというもので…

その…残念ながら顔が…あの…あまり良くない。

いや、正直「あまり」という言葉には収まらない。身も蓋もないことを言えば不細工なのだ。それも極度の。天は二物を与えずと聞くとが両極端すぎる。私もこの学園に来て長い但未だに慣れない。

初めて指揮官を見る者は等しく顔を歪める。重桜の言葉でいうところの…チミモウリヨウ？その破壊力是一部の駆逐艦に至っては泣き出すほどだ。初期艦であるジャベリンが指揮官の性格のフォロワーをしなければ、誰も彼に付いて来なかつただろう。

顔が良くないのは指揮官自身も分かっているようで、基本的に大きなサングラスとマスクで顔を隠している。さらに私達艦船から距離を取ろうとしていることが言動から伝わってくる。気を遣ってくれているのは分かる…が、寂しい気持ちもある。多くの艦船が指揮官を慕っているのだ。それは私も例外ではない。

この指揮官の顔面問題、どちらかという艦船側の方が気にしている。

顔を隠している以上、指揮官も全く気にしていない訳ではないだろう。自分の顔を自虐する発言もなくはない。

問題は私達。彼のことをもつと知りたい、という気持ちがあるのに行動ができない。あの顔を知っていると、どうも上手くコミュニケーション

シヨンが取れなくなる。

人間は顔じゃない。中身だ。と何度自分に言い聞かせても、性格の良さを外見が相殺してしまう。それ程までに指揮官の顔面は壊滅的なのだ。

そんな私の指揮官は鉄血の艦船をよく出撃させている。彼女達はドライな性格の子が多いので、あまり上官の顔というものは気にしていないらしい。特にアドミラル・グラーフ・シユペー。彼女のドライっぷりは驚嘆に値する。当然、全員が全員そういう訳ではないけれど…

逆に深刻なのはロイヤル。女王であるクイーン・エリザベスが指揮官の顔を見て半狂乱になったことは目に焼き付いている。フツドやウエールズのような大人はいいのだが…陣営全体の士気は限りなく低い。

指揮官は『無理に出撃しなくてもいいよ』とは言っているものの、流石になんとかした方がいいと思う…

2話

今日は新しい艦船が何人か着任する。ちようどユニオンからの艦船ということで私も立ち会うことにした。着任する際は個別で指揮官に簡単な自己紹介を行う。

顔を隠した指揮官を相手にするので、初めての艦船は決まって同じ質問をする。

「はじめまして。ノースカロライナです。これからよろしくお願いします。」

「ああ、貴殿の活躍に期待している」

「あの…そのマスクとサングラスはどうしたんですか？」

そう。素顔の確認だ。

「これは気にしないでほしい。お互いのためだ」

指揮官はいつもこの返答をする。悲しいことに本当にお互いのためなのだ。素顔を見てしまうと性格とのギャップに苦しむことになってしまう。

「指揮官がそう言うなら私も気にしません」

どうやらノースカロライナは深く気にしないタイプらしい。彼女のように指揮官の顔を知らずに過ごしている艦船も存在する。しかし残念ながらそれは少数派だ。

「チース！アタシはワシントン！これからよろしくな！」

「はじめましてワシントン。貴殿の活躍に期待している」

「おいおいなんだそのサングラスは？ちゃんと外してアタシを見ろ！」

血気盛んな性格だったり駆逐艦のような多感な子はこうやって指揮官の顔を見たがってしまう。彼女の言ってることは何も間違っていないのに…あまり勧めたくない。

「…私の素顔を見て後悔しないかい？」

こういう顔を見たがるタイプには指揮官はこの質問を投げかける。これで思い留まった艦船は見たことないが…

「なに訳の分からないこと言ってるんだ？いいから外しな！」
「なら…」

指揮官の封印とも言えるマスクとサングラスが外される。

「…………アタシが悪かった。着けてていいよ」

「すまないね」

あの元気で威勢のいいワシントンがここまでしょぼくれるほどの破壊力。悲鳴を上げないだけ大分マシな反応だ。

「おいエンタープライズ！ちよつと…」

執務室を出て行ったワシントンに手招きをされたので、指揮官に一礼をしてから彼女についていった。

「なあ…お前あの指揮官の下で働いてんのか？」

休憩室に招かれて開口一番そう聞かれた。ものすごく失礼な発言だが何故だろう。強く言い返せない。

「言いたいことはわかるぞワシントン。でも安心してくれ。見た目は確かに…悪いかもしれないけど指揮官としての腕は確かだ」

「嘘だろ本当か!?!どつかの本で見たバケモンと同じ顔してたぞ！」

「君はそういうことを気にする性格じゃないだろう？」

「アタシにだって限度はある！」

「とにかく落ち着こう。何か飲もうか」

自販機の安い缶コーヒーを奢り、なんとかワシントンを説得させた。なんだか満足していなさそうだったが…彼女の性格なら数日後には割り切ることができようだろう。

ワシントンの後にも自己紹介が続いたが、執務室から出てくる艦船達の顔は揃いも揃って不安そうだった。カークとホビーは泣いてしまったのだろう、くつつく二人をノースカロライナが慰めていた。どうか指揮官を許してほしい。彼は泣かせたいわけでも怖がらせたいわけでもないのだ。

指揮官の顔は気持ち悪さからくる恐怖でダメージを与えてくるタイプだ。うん、我ながらとても失礼なことを言っているな。

「指揮官…その…整形とかはしないのか？いや、顔が嫌だからというわけじゃなくて…」

艦隊の士気に関わることなので思い切ってさらに失礼な質問を投げかけてみた。

「勿論試したさ。しかし残念ながら医者が『頭蓋骨から丸ごと取り替えないとダメ』だと匙を投げられた」

「そうか…すまない…」

指揮官がなんの対策も講じてないとは思っていなかったが…まさかそれほどとは。

さてうちの指揮官、特段太っていることも痩せているということはない。むしろがっちりとした筋肉質の男らしい体格をしている。しかし悲しいことにそれが威圧感を増幅させている。素顔抜きにしてもあれでサングラスにマスクをしていたら身構える。

とにかく、問題は首から上だけなのだ。

3話

艦船という存在は不思議なものだ。今もどこかの学園で私と同じ「加賀」がいるのだ。その「私」は何を考え、どう行動しているのか…着任したての頃の私はそのことについてよく物思いに耽っていた。その後聞いたのだが指揮官曰く、同じ艦船の性格は環境が違えどほとんど変わるものではないという。

当時の私はそれを聞いて「そうなのか」としか思わなかったがすっかり失念していた。

艦船の中には指揮官を病的に愛している者がいることを。

姉様は苦しんでいた。

大鳳も苦しんでいた。

「ギギギ…」とか「グググ…」とか唸りながら歯をくいしばり、身体を…なんだ?とにかくめちやくちやくに捻っている。この二人は定期的にこのような発作が起きる。

私と赤城姉様は同時に着任した。そして指揮官の顔を二人で見た。あの顔を見た時、私は全身に今までに感じたことのない恐怖を感じた。それも尻尾の一本一本の毛が逆立ったのが分かる程の。あまりの圧に顔を逸らすとそこには彫像が如く固まった姉様の姿があった。それからだ。姉様がおかしくなってしまったのは。いや、身内の私から見ても元々まともではなかったが、本当におかしくなってしまった。

「顔の美醜などというちっぽけなものでこの赤城の愛が止められるわけ…うぐうぐううぐう!!」

「指揮官様あ…私は貴方を愛して…愛し…ふんがああああああ!!」

とてもじゃないが見てられなかった。

半年後、大鳳が着任した。

姉様の好敵手…違うな、恋敵？とにかく私はそんな奴の顔を拝みたくて着任の挨拶に立ち会った。

入るや否や奴は「指揮官さま♡」と耳の毛が萎びる不快な声を上げながら指揮官の仮面を引き剥がした。するとどうだ。まるで時間が止まったかのように大鳳が動かなくなっただけではないか。

一連の流れがそれはそれは可笑しくて笑っていた私に対して指揮官はこう言った。

「…加賀、大鳳を君達の部屋に連れて行ってくれるか」

「…は？」

どこから聞きつけたのか姉様と大鳳が不仲だということを知った指揮官はあろうことか私達と大鳳を相部屋にすると言い出した。理由としては関係の修復が狙いだという。我が指揮官ながら甘ったれたことを言うし、丸くなった私も私だ。すんなりその提案を受け入れてしまった。

こうして今の惨状がある訳だ。見ろ、この二人の顔を。まるで地獄の底で釜茹でにされているかのような。皮肉なことに、指揮官の思惑通りある意味二人は仲良しこよしだ。

私か？正直言うと指揮官の顔はまだ怖い。しかし逆にそれ以外のあらゆる事象が全く恐れるものではなくなった。

4話

「エンタープライズ様、明日の秘書艦を代わってもらってもよろしいでしょうか？」

「別に構わないが…理由を聞こう」

「実はですね…」

聞くところによると明日は新しいロイヤルメイドが増えるという。その名もシリアス。戦闘はメイド隊でもピカイチだが残念なことにメイドとしてはまだまだ未熟らしい。

そこでメイド長たるベルファストが仮にシリアスが粗相を起こしてもすぐさまフォローでできるようにしたいとのことだ。

「未熟だからと言っても明日は指揮官に挨拶するだけだろう。私がそのまま秘書艦でもいいんじゃないか？それともそんなに問題児なのか？」

「いえ、シリアスは問題児なんかではなくむしろ頑張り屋です。しかしその頑張りという気持ちが空回りしてしまうというか…とにかく、彼女のメイドとしての教育の意味も込めて明日だけでも秘書艦を代わってほしいのです」

頑張る気持ちが空回る…確かに善意で取り返しのつかないことになってしまう可能性があるな。

「わかった。明日の秘書艦は任せよう」

「ありがとうございます」

その時点ではなんの問題もなくベルファストと別れた。

ところでロイヤルメイド隊は現在ほぼ機能停止状態である。ほとんどが指揮官の顔を見てしまったからだ。ベルファストとニューカッスルが問題なく活動しているのはその顔を見ていないからに過ぎない。あの冷静で無愛想なシエフィールドでさえガタガタ震えて泣き出したほどだ。

そんな中に未熟者のメイドが入隊するのだ。ベルファストが教育したがるのも無理はない。いや、流石に挨拶するだけでアクセシデントが起こるとは…でもあのベルファストの様子は結構焦っていたな…

「…眠れない」

その夜は無理矢理に目を閉じて意識を落とした。

今日はシリアスの着任日。今日のことか心配で全然寝れなかった上にやたら朝早くに起きてしまった。

彼女の着任まではまだ時間がある。艀装の調整でもして気を紛らわせよう。

「……………」

だ、ダメだ。指揮官とシリアスのことが気になって全然矢が真っ直ぐに飛ばない。

「お、グレイゴースト？こんな朝早くに珍しいじゃん」

しまった。今一番会いたくない相手に見つかったぞ。負けず嫌いの瑞鶴に手合わせを挑まれると長いんだ。

「…艀装の調整だけだ。手合わせはまた今度にしてくれ」

瑞鶴とは目を合わせずに次の矢を装填した。こうやって素っ気なくしていれば彼女も諦めやすいだろう。

「ちえっ、今日こそは勝てる気がするのになあ…あれっ？なんか本当に調子悪い？」

雑念まみれの矢は明後日の方向に飛んで行った。

結局気になって執務室に向かうことにした。

今頃はシリアスも着任の挨拶をしていることだろう。いや、心配することはない。あのベルファストがついているんだからきつと大丈夫…

「ぎゃあああああああああああああああああ!!!」

「何事だ!？」

紅茶で濡れた机。顔を押しさえる指揮官。石膏のように真っ白に固まったシリアスと思しき艦船。そして膝立ちで真っ青な顔で白目を剥き泡を噴くベルファスト。

「……うわぁ…」

何が起こったかは大体把握できたがこんなにグロテスクなことになった艦船は初めてだ。あの悲鳴の主は誰だったのかはもうどうでもいいことだった。

「エンタープライズ、タオルを取ってくれないか？」

「あ、ああ…それにしても何があったんだ」

「恐らく君の予想通りだ。しかしシリアスの運動神経の良さが仇になったようだ」

シリアスがミスで紅茶を溢し、指揮官の顔にかけてしまう。ここまではまだベルファストがカバーできた。だがシリアスは指揮官の顔を拭くためにベルファストが静止するより素早くサングラスとマスクを剥ぎ取ってしまったのだという。

その結果がこの惨状だ。ベルファストから噴き出す泡は止まるところを知らない。

「もしもしヴェスタル？急患だ。場所は執務室。担架と何か掛けるものを持ってきて欲しい。できるだけ大きいので…」

まるで遺体を扱うかのようにベルファストを医務室へ運んだ。彼女が目覚めたのは三日後のことだった。シリアスは自分のしでかしたことを深く反省し自ら進んで謹慎している。

メイド長を失ったロイヤルの士気はさらに下降。もう片手で数えられる程度しか出撃できる者はいなくなった。

5話

ケツコン。

それは指揮官との間に強い絆を持った艦船だけが執り行うことができる儀式。指揮官から渡される誓いの指輪を付けることで私達はさらに強くなれるという。ケツコンという名称から、全ての艦船の憧れでもある。

…というのが大抵の学園に属する艦船達のイメージだ。

しかしケツコンと言っても所詮は人間と艦船。子供を作ることにはできないし、夫婦になったからと言って何か特別なことをするわけじゃない。単なる性能の底上げと言ってしまえばそれだけの話で済む。

…そう自分に言い聞かせないとやっていけない。

指揮官のことは好きか嫌いかで言えば好きだ。むしろ嫌いになる要素が全く見つからない。顔？そんなもの愛の力の前では…うぐう…

先にも述べたが私達艦船は人間の子供をその身に宿すことはできない。いくら指揮官の顔が不細工でもまず子供が作れないのだから遺伝の心配は皆無。ただ共に生活するなら見た目というものがなんとも微々たる存在か…うう…

ダメだ。やっぱり顔を気にしてしまう。

わかってる。わかってるんだそれがいけないことぐらい。私の指揮官が好きだというこの気持ちが変わらなくなってくる。性能の強化なんてどうだっていい。ただ彼に伴侶として選んでもらえたらそれは実に幸せなことじゃないか。そうだ、私は指揮官の側にいるだけ…で、でもでもせつかくケツコンするならやっぱり夫婦らしい営みの一つや二つ…あー顔が、あの顔がチラつく！

「…んもうー」

はつきりしない自分に苛立ち、思わず机を叩く。自分でも色恋沙汰には疎いと思っているが…

「どうしたのエンプラ姉そんな怖い顔して」

「ホーネット…相談があるんだ」

指揮官が好きだ。しかしどうもこの気持ちの本物かわからない。私はどうすればいいんだろう？

「…ごめん、私もちよつと…よくわからない…」

なんてことだあのホーネットが。彼女のことなら『そんなこと気にしないでドーンとアタックしちやいなよ！』みたいなことを言ってくれるのを期待していた。正直背中を押してくれるだけでも良かったのに…

「なんだホーネットは指揮官のことが嫌いなのか？」

「えっ、いや別に嫌いじゃないけど…」

「君らしくないぞ。はつきりしろ」

「……………普通」

「なんだって？」

「普通！好きでも嫌いでもどっちでもないの!!」

「わ、悪かった…」

どうしよう、まさかホーネットですらあんな回答だなんて…もしかして指揮官が好きで酔狂は私しかないのでは…？

いやまだだ。指揮官の顔をものともしない鉄血の面々がいることを忘れていた。正直苦手なのだが…オイゲンにでも聞いてみよう。

「指揮官のことが好きか嫌いか？どっちでもないわよ。言つとくけど鉄血の大体は指揮官のこと単なる上官としか見てないわよ？流石にあの顔じゃねえ…」

私は悩むのをやめた。馬鹿らしいというかなんというか…どうやら考えてはいけない問題だったらしい。

6話

ケツコン。

それは指揮官との間に強い絆を持った艦船だけが執り行うことができる儀式。指揮官から渡される誓いの指輪を付けることで彼女達はさらに強くなれるという。ケツコンという名称から全ての艦船の憧れでもある：らしい。

私は自他ともに認める不細工である。もはや不細工という言葉では収まらない程度の。なので結婚どころか女性とお付き合いすることすら不可能だ。そもそも日常的な会話だって怪しい。艦船達から距離を置かれるのも仕方ないことだと割り切って真面目に仕事をしてきたつもりだ。そんな中飛び込んできたのがこのケツコンの話。書類一式と指輪がついにこの学園にも届けられた。

言うまでもないが誰にも渡す気はない。戦力強化の目的でケツコンしたら相手に失礼だ。何故ケツコンという名称にしてしまったのか。何故指輪なのか。勘違いを生んでしまうからせめてブレスレットあたりにして欲しかった。

ところで、私はこんな風貌だが両親は普通の見た目をしている。一人っ子の私を大切に育ててくれたし、こうして国を守る仕事にも就かせてもらった。荒れた時期もあったが両親には感謝してもしきれない。本当は子供の一人でも儲けて親孝行したいものだが：そこは察してくれているようだ。

さて、ケツコンに必要不可欠なのは艦船との絆。ケツコンしている同僚の指揮官曰く、「目から想いが伝わってくる」らしい。

残念ながら間違いなく異性としては好かれていないことぐらいは分かる。女性関係が母親以外に全くない私でもだ。なんて言うんだろう。とにかくサングラス越しでも無理してる感じがひしひしと伝わってくる。

こっちも無理して関わってもらわなくていいのに、言葉にしてはつきりそう伝えているのにも関わらず何故だか彼女達は『頑張る』。頑張るのは出撃の時だけでいいし、嫌なものを無理して見なくてもい

い。こちらは出来る限り顔を隠して自衛しているのにどうしても見たがる。「押すな」と言われると押したくなるようなものだろうか？
現にロイヤルの艦船達が洒落になってない状況なのだが。

顔が原因でいじめられたり差別されることは多々あった。それは仕方ないと自分に言い聞かせて耐えることはできたが、顔が原因で他人に深刻な精神ダメージを与えてしまっているのはもつと辛い。

秘書艦のエンタープライズには本当に申し訳ないと思っている。彼女も多少は慣れたのだろうが面と向かうと顔が引きつっている。最近は元気がないようにも見えるし…そろそろ長期休暇を与えた方がいいな。

7話

指揮官から1週間の休暇を貰った。どうやら最近の私が疲れているように見えたらしい。確かに私の出撃回数は他の子よりは多いものの1週間も休む程ではない。しかし指揮官に頼まれると断れないというか：謎の威圧感を感じてしまう。

休みを貰った次の日にはユニオンから新しい仲間が増えることだったので立ち合いだけはさせてもらった。

しかし今回は全員顔を見てしまった。指揮官も私も警告したのに：とにかくみんな泣いたり叫んだり気絶したりと阿鼻叫喚の地獄絵図。ブレマートンがギリギリ耐えたものの残りは全滅した。また私はヴェスタルに電話をかけることになるのだった。

「エンタープライズちゃん！私何度も言ってますよね!?新しく来る子には指揮官の顔を見せないようにしてっ！」

「してるよ！私も指揮官もちゃんと警告しているんだ！それでも見たがるから…」

「それでこの有り様ですよ!?ブルーギルちゃんなんて呼吸に異常が出てるんですから!」

奥のベッドに目をやると酸素マスクやチューブに繋がれたブルーギルの姿が。まるで大手術を控えているみたいだ。その他にも白目で泡を噴いて気絶しているイントレピッド、うずくまって震えているリノ、何かブツブツ呟いているクーパー…

私はメンタルキューブに刻まれた記憶で戦争やその惨状によっておかしくなってしまった人々を見たことがある。彼女達の症状はまさにそれに近い。大きな違いとしては原因が人の顔を見たということだが：

こうして精神的にやられた艦船は学園のおよそ8割。メインで出撃している鉄血だつて全員が全員無事ではない。

ヴェスタルによると指揮官の顔で精神がやられたことによる主な症状としてはあの顔が度々フラッシュバックすること。夢に出

たり幻覚が見えたりするとか。あとは個人によって目まい、吐き気、頭痛、悪寒その他諸々：戦力を奪うには十分すぎる破壊力だ。

ちなみにヴェスタル自身は指揮官の顔を見ていない：ということになっている。私は立ち会っていたので指揮官とヴェスタルの顔合わせを見ていた。失神するところまで含めて。

私は医療に関してはさっぱりなのでこれは憶測だが：失神した際に彼女の防衛本能があつた顔の記憶を瞬時に消し去つたのだろう。以来、ヴェスタルは指揮官の顔を見ようとしなない。

1週間あつた休みはユニオンの同胞達の看病で終わってしまった。休みとは言え何かをする予定もなかったたのでそれは別に構わないのだが：彼女達の心は救えなかつた。

そして指揮官が深刻なトーンでこう言った。

「エンタープライズ、私はもう指揮官を辞めようと思う」

最終話

指揮官は学園を辞める決心をした。

理由は自分の顔が原因で傷ついた艦船を増やしすぎてしまったとのこと。これ以上被害者を出さないためにも責任を取って辞めるのだという。

「…ということだ。明後日にはもうここを出て行くが心配しないでほしい。すぐに代わりの指揮官が来るはずだ。」

「ま、待ってくれ指揮官！貴方の代わりなんて誰もいないんだ！」

「ははは、そりゃこんな顔をした人間の代わりなんていないだろうよ」「そういうことじゃなくて…！」

必死に食い止めようとしても私は論破される一方だった。指揮官の言うことが全くもって正論すぎて話にならなかった。

次の日の朝。

動ける艦船達の前で指揮官が辞める旨を発表した。

少しはざわついたものの、声をあげて反対する者は誰もいなかった。私としては少しぐらいいてほしかったのだが…大勢の注目もあるし言い出しにくかったのだと思いたい。

明日には指揮官が出て行ってしまおうので今日は全員、全ての学園機能は休みになった。秘書艦らしく最後まで指揮官の手伝いをしたかったのだが、彼の準備は完璧でほんの数十分で終わってしまった。いずれこうなることを見越していたようだった。後は私が後任の指揮官に引き継がれた仕事を説明するだけだ。

「ありがとうエンタープライズ。後は任せたぞ」

サングラスとマスクに覆われた彼の顔がなんとなく笑ったように見えた。

今日は何もすることがなくなった私は部屋のベッドに寝転がり、ぼーっと天井を見上げていた。

ここに着任して1年と数ヶ月。指揮官とは長い付き合いだが、思い

返せばあつという間だった。こんなに早く指揮官が辞めてしまうのだから。

目を閉じると浮かんでくるのは指揮官との思い出。

初めて指揮官の顔を見たあの日。心臓を鷲掴みされたような衝撃を受けた。

そしてセイレーンとの終わらない戦いの日々。

…ん？おかしいな…戦った記憶は多々あれど指揮官との思い出がほとんど出てこない。指揮官の顔がすぐくて…指揮官の顔がとてつもなくて…

「う、うーん…うーん…」

「姉ちゃんうなされてるけどどうしたの？」

「そつとしておいてあげましょう…」

朝起きたら指揮官は既にいなくなっていた。私達への感謝と、今日にも後任の指揮官がやってくるのが書かれた手紙を残して。せめて見送りぐらいはさせてほしかったが…彼なりの配慮だろうか？

指揮官のいなくなった執務室で、ジャベリンと私は窓から校門を眺めて新しい指揮官の着任を待っていた。

「エンタープライズさん、新しい指揮官さんはどんな人でしょうか？」

「さあ…優秀らしいが見たことはないって彼は言ってたな…」

「カッコいい人だといいですね！」

私はあまりそういうことは気にしないタイプなんだが…一応期待することにはしよう。

「あー来たみたいですよ！」

正門にそれらしい車が止まるなり、ジャベリンは部屋を飛び出していった。

「全く…元気だなジャベリンは…」

彼女を追いかけて校舎を出た瞬間のことであった。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああ!!?」